

現代を活かす宗学について

室住一妙

第一、序 章

この稿は「現代に生きる宗学とは?」と問はれたことから出た。私はひそかに、もうちつと、つつ込んで「現代を活かす宗学」を求めていたのである。それはただ、いわゆる宗学者の宗学ではなく、宗学者も信者も行者も僧俗すべて否全人類、このセカイ人類の運命等を一ぱいにはらんでる現代を、それを健全に何とかしなければならぬのである。それをやり得る宗学を求める。全く身のほどを知らぬ、大それた希望だが、少し考えてみれば、他宗他教はともかく日蓮宗においては当り前ではないか。後五広布といい、末法応時の大導師といい、特に本仏釈尊よりつかはされ、如説修行して、その經文の厳しい条件を一々に具足して実証なされたのではないか。

「天じく国をば月氏國と申す。仏の出現し玉うべき名也。扶桑國をば日本國と申す、あに聖人出で玉はざらむ。月は西より東に向へり。月氏の仏法の東へ流るべき相也。日は東より出づ。日本の仏法の月氏へかへるべき瑞相也。月は光あきらかならず。在世は但だ八年なり。日は光明、月に勝れり。五五百歳の長きやみを照すべき瑞相也。仏は法花経誇法の者を治し玉はず、在世には無きゆへに。末法には一乗の強敵充满すべし。不輕菩薩の利益此れ也。各々我弟子等はげませ玉へ、く。」

全く、空をそろしいことだ。だがやらなくてはならない。「そらをそろしい」というたのはこれまで、おぼうさんの宗教(葬式仏教)のうちの一派として、そう流されてきたならわしとしてはそう感するのもムリはない。最近多少青年運動・護法・信行等のめばえはたしかにあるが、現

代病のバイキンにとりつかれぬよう、厳しく自他内外見守つていただきたい。本來あるべき見守り方、育くみ方の魂

こそが、本当の日蓮宗学ではないか。利害打算もせず、大衆の人気も、國家権力も民主主義も共産主義も一切かなぐりすべて、宗祖に直参するのである。例えばあの当時、九十の阿仏房が、二度三度、佐渡から身延へお給仕に来たよう、鎌倉の信女が幼兒を負うて佐渡が島へとあこがれた

ように、四条金吾が竜口の刑場で殉じようとした、その赤心恋慕渴仰が、實に種子である、成仏の種子である。純粹宗学の原点である。——それが七〇〇〇年後、昭和五〇年の、二〇世紀末の今日現代を活かすべき宗学に外ならない。そんな事は別に学者の仕事ではないではないかといわれればその通り、それでいい。その中から必要に応じて問題をとりあげ、又当然たる方法が出てくるだろう。すべての宗門布教經營財政一切がよみがえつてくる筈である。なまじいに、コマシヤクレタ運動や修行や活動はかえつて危いのである。バカはバカなりに、行学のない荒凡夫としてスナホにマジメにシンケンに、大聖人さまのお手にぢかにすがつて、つかまえていたくだくことが大切である。

——たれさがるおん題目のいのちづな地獄の底に今し吾とする——塵点の劫をしがれて今吾等日蓮の御名きまつりしよ——皆の衆えんりょはいらん今すぐと仏と成れよ仏となせよ——能くたもてガマンヘンシウなくたもてみんな仏と

すぐ成る題目。

第二章 日蓮大聖人と俱に

△

そうありたいとねがうわたし そうあらせたいとねがうわたし それがいつわらぬ現実それが誇らしい理想だから他人にお説教することでなしにひそかに自分自身をたしかめながら訓えるこの一句であるはげますために掲げてこの八字である

△

給仕第一というのはおののがそれぞれにそれなりに誰にでもできることではあるがまづ俱に在ればこそできる光榮である

ところがその俱にあればこそ「俱に在る」ことへの関札(せきあだ)とは何だらう
「まこころは尊きものとひれふして宇宙すべてが拝む月の来る」

俱に在るとはいつでもどこでも誰にとつてもおののがそれぞれにそれなりに俱に在り得る態度はひとつ素直にまじめにしんけんに生きることが全宇宙を信ずることであるすなほに眞面目にしんけんに信ずることが眞実を行ずることである。すなほにまじめに真剣に行づる

ことが 仏と成ることである

これよりほかに どう生きることでもなく 何を信ずる

のでもない 何を証するのでもない そのわけは この全
宇宙は タッタ ひとつ だ

△

そのむかし 生きとし生けるものと もろともに生き
群生の一切の生の体系に とつ組み すなほにまじめにし
んけんに 求めて信じて 行じて 全宇宙的生を証したま
うた。 ああ 大覺世尊！

△

「我れ仏を得てよりこのかた……衆生既に信伏し 質直
にして 意 柔軟に 一心に 仏を見たてまつらむと欲し
て 自ら身命を惜します……毎に自ら是の念を……」

これは これは 永遠に 人類生類の魂に共鳴を起して
止まないみことばである 正に 如来誠諦の語である！
ああ 久遠実成如來！ 南無釈迦牟尼仏

△

五つの濁りのただ中で すなほにまじめにしんけんに
全一仏教を信じ 正統の真実を求めて 徒つしんで別付
を体し 摺ばれた時刻に決戦を宣し 三類四難の濤波を浴
び 三障四魔の山岳を超えて 大難すでに破れぬ 余党は物
の数ならず。 (一六六七) 遣使還告果し得た

ああ 一えんぶだい第一 全一仏法の行者 南無日蓮大

菩薩！

△

まったくのこと 凡愚とか下劣とか いうもおろかな
凶悪な狂顛 のわれわれである

せめてもと とりすがる 正信の剛毅に 必死の誓いを

こめて叫ぶのである
「日蓮大聖人と俱に」

△

だから 決して もう つまらぬ みえははるまいと思
おう 名誉も地位も 荒行も苦行も……いらぬだらう た
だ 平々凡々の正常さでしつかりと そして淨らかにつと
めること

賢明さよりも正常さ！ 正常さよりも誠実さ！ 愚にか
えった正常さの底に徹した誠実さで 日蓮大聖人と俱に
給仕第一につとめたならば よろしいのでしょうか

△

われわれが この身このままで 仏に成れるという 即
身成仏とか申すのは やっぱり こんな意味で「給仕第一
に徹すればいい……いつもわたくしと俱に在れ」と
こう日蓮大聖人はおっしゃるのではないでしようか。
(六二四・七二九・五一三・七二一・八四一)

「夫れ信心と申すは別にはこれなく候……すこしもすつ
る心なく案じ給べく候」 (一七四九)

△

われわれは もつともっと賢明になるよう勉強しなくてはならないだろう 時代についても社会に対しても 世界の情勢はもとより 人間個々についても現実の生活についても 一人前の常識はもちたい また さらに まともに

考える力はなくてはならぬ だが しかし ともかくも この時代や世界をひきさいで 仏の世界を実現していく そういう道のあるということを 聞くだけでも 世界第一の重要な事件ではなかろうか —— そうだとすれば ましてや 「日蓮大聖人と俱に」というだけでも 宇宙第一の光栄だと信じてもいいのではなかろうか 名実のともなえば なおなおのこと

△

ふと だれでも 見る みたら 読む よんだら考える かんがえると いのちの魂に ふれる ふれたら じつと してはいられぬ さぐる さぐる 思う 思う よるものひるも そして 大聖人さまの前に ひざまづく あとは 一対一 そして 絶対の一

△

そこは 世界も宇宙も 寂かな光が いっぱいに 生き生きしてある。——私は それを祈つてペンを描く。

(佐渡阿闍梨日向上人の忌日昭和四一、九、三〇。)

ここに大きなテーマの中に編入してみると、この詩章は現代を活かす宗学の方法論とみなしてもいいだろう。そうしてさらに、客的な動きが之とかにかかわりあうのが実際面の様相である。

第三章 いのちの連環

之は偶作の詩です。今まとめて刷るために題を求めるられたので、とりえず「いのちの連環」としました。そのわけは、○本地は使命、△とんだことは運命、×思索は召命。みんな命の字がついている。その中にも、召命は本地に発し運命にもてあそばれながら、自己を恢復し本地の使命を果すもの、現代将来の世界的な問題は、平和戦争政治等よりも教育に重点が動き、教育するものされるもの等しくみんなが道を求めずにはいられない。

連環というのは、各自独立の詩章の環でありながら、前後につながる次第でイミが變つてみえる。三つのよみの区切りで、例えは、○△×の順でよむと我々日蓮宗徒はもつと、世界的に問題を宗祖に呈上して思索すること、△×○とよむときは法花経をふかく味読すること、×○△とよむときは日蓮聖人御一生から宗門全体の自覚が問題になる。

○ 本 地 — 使命

今 想像してみる——この地球のセカイを ずうつと昔

にさかのぼる。まさに宇宙時代のセカイとでもいう幾千万億年の人類生類 動植物の生命の系譜をさかのぼる。いわば生命の本源のふかい地層にひそみ 修行しつづけているボサツさま 久遠実成の釈迦如来さまのぢきぢきの新発意のお弟子だそうです。そういう文章が人間に読まれ出してからまだ わずか二千年 ただ ふしきなことよ おもしろいことよと 仏教徒の間のちょっとした話題になつたこともあつたというだけのようです

それがどうでしょう——今から七百年前 日蓮聖人がこの菩薩さまの本性 使命を人類に紹介して下さいました。それもただ筆舌だけでなく 人間行動として いや面白いドラマとしてです それも その大きさといい 仕組みといふものが とてもふしきで 大がかりなのです 現実の時代社会が そつくり舞台となり あらゆる人物も動物も自然もそつくり参加する役者であり また観客でもあるというそんな大きな歴史劇の主役だというのです 御本人だというのです

始めなき始めから 終りなき終りにつづいていくが い

つまでも未完成な無限連続というのでもない

ちゃんと 筋は通つて 厳肅な論理も結論も実証もある

弁証も意味も大へんに深く面白い 謡歌もそえられ 茶番

劇もふくみ 今も現に一目でみているでしょ

球上のみんなが観賞しているでしょ たしか 毎日天に

かがやく太陽はたつた一つだとしても みんな一人一人にはそれぞれの朝があり夕べがあつて 仰いでる 拝んでいるでしょう 月へは人類の数人が たしか往つて来たそうだし その他の星へは これから数年後数十年後の予定に入つてゐるらしい そんな大自然 大宇宙の舞台をふまえてお互い 一人一人が自転公転しつつ、それぞれイミある円舞曲を ふるまうて いる どうせのこと「不思議の運命にのり、尊い使命を果せよ」という御宣言なのです その尊い聖なる大役目をたしかにフルに実現せしめる 唯一つのテーマの意味は 「ほんとに讃ふべき妙法蓮華といふ經典」 = 南無妙法蓮華經。……この超絶した長篇、意味深長の無限劇の最も重要な一段を立派に果し丁えられた人をたたえて私どもは これまで こう申し上げて来ました
「南無妙法蓮華師 本化上行 高祖日蓮大菩薩」

(45 8 10)

△ とんだこと——運命

①とんだこと とんだこと ソシの首が とんだ 木像の首がとんだ 身延の祖師堂の大首が盗まれた

一九七〇（昭和四五年）あれから七〇〇年目の九月十二日

○坊主の首はおがむ首、本氣になつて挙む首 生きてるか

らには憎まれる 刀千本折れたそな

③だからこそ挙まる 木像までも挙まる すぢがあれ
ばこそ 挙むものと挙まるものと

④たしかなすぢをたどってみる——

諸天善神 一山の守護神たち どうして守らぬのか そ

れとも守れぬのか

⑤或は挙まる首に魂があるからこそ やたらおがむガソ
クビを嫌つたのか

⑥……君の首 ぼくの首……切捨御免の……生首なんかと
んでもない……だからこそ ソシのクビが とんだのか

⑦千部万部の経ダラよりも

木像のお首にはニカワがいい?

⑧祖師のお魂は何んじやいな?

(45・9・19)

×思索——召命

①人間としての教育、人類としての教育文化人としての教

育……戦争を通らずに平和のうちに可能であるか 公

害を仕末する教育よりは、公害を招かないで立派に健全

にやってゆけるような教育はいかにして可能であるか

——だから「教育の世紀」といわれるのか、そんならば

ほんとうの教育とは、人間として、人類として、文化人

として、何であるか

人間、人類、文化人の生き方の重いイミにつながるもの

のとして新めて問いたい 末法——十二・三世紀から、
六・七世紀にわたる今日の世界史における大きな特質を
感じうる

それは、内乱と侵略、戦争革命、世界中がいわば脱皮
をつづけてきている

宗教が戦争を呼び文芸復興（ルネッサンス）のめざめ
となり、産業の革命をよび 社会の政治の階級の革命か
らさらに二回の世界大戦 さらに科学原理の革命から只

今情報革命 精神革命に及んでいる

人間が人類として 文化人として生長していくとき

当然脱皮する内外にわたって脱皮しなくてはならないだ
ろう

ついにすべてナンセンスとなり 断絶となり ○×式
に自己のために他人を否定しなくてはならないのかどう
か

では 自己とは何か 自己が自己に問い合わせる 自己

が自己をさがす たしか 型通り、文字通り（漢字の）

……道という字である 首にシンニウがかかるて求めあ
る いているではないか 道は常の道にあらず（老子）字

宙の原点に立つすぐたである

②ぬきとられたお首の穴にどこからか ひろうてきたお首
をそっくりはめこんで めでたしめでたしとおさまるわ

けではあるまい

ひろうてこなくとも、ミノシロキン（身代金）で、あがなえたとしても、または別に第一流の芸術家にたのんで日本第一のソシ像に、金ランのケサ衣をまとうておよろこびになるおソシさまではないし、さてさて外の首ではない内の首うちくび

たしかあのお首は、ギフン（義憤）ドーコク（懲

哭）、ケフクワン（叫喚）なさったお首であった。そして恐いうきごえガキチクショウシユラヂゴクのドロドロしたのろいやらうらみをあざやかにきれいに切りさばいて天地一ぱいに祈念なさったお首であつた。そのお首は下から仰ぎたてまつり三拝九拝されたいお首ではないし、みたり聞いたり味はつたりほめたたえてもらいたいお首でもなく、そのお首のコンパクそのものになることそれがうちわのお首、コンパクのお首であろう

③お首のありどこはたしかそこであるここであるわれわれの五体の最上頂部にまします真実まごころのやどるところまごころはとうときものとひれふして字宙すべてが拝む日の来る法に依り人に依らずして一すぢに太刀わたる身の浮雲をこゆ

「日蓮といいし者は、去年九月十二日子丑の時に

首はねられぬこれはコンパク（魂魄）佐渡の国にいたりてかへる年の二月雪中にしるして有縁の弟子へおくればをそろしくてをそろしからずみんないにをちぬらん

此れは釈迦多宝十方の諸仏の未来日本國當世をうつしたまうべき明鏡なりかたみともみるべし」（開目抄）

コンパクとはかがみとはうつして見るとはたれがみるのかたれをみるのか頭首顔面眼目自己をみつめながら思う——なまなましい外とのかかわりあいをみとめながらそれをいよいよ正しくあらようたしかめることそれがいよいよ深くあるようつとめることそれがいよいよ大きくなるようまことをつくすこといつも現実を全体のかかわりあいでとらえるしかも過去から現在未來へと生きのびてしかもすべてを生かしていく

あえて全責任をとるもの——
そのお顔面と眼目とそのお首と
お生命とお精神とをうけつごう
全世界人類のみんながうけつごう
……………あのお首に直結して。

第四章 いのり

どうか みつけてくれ

この詩句は、開目抄を拝読して、大聖人の御心情のほどを、拙いながら、御同情申し上げた詩句です。実際我々が現代に生きていいくかぎり、現代を活かそうとする限りは、こういう「いのり」はなくてはならないでしょう。

一

いのり それは

自分のためは みじんもない

だが全身全靈 祈り一ぱい

いや 一生だけない 生々世々かけて

たつた一つの祈り

日本のために？

そうだ 日本に生まれた以上 それが至誠だ

人類のために？

そうだ 人間に生まれた以上 それが至誠だ

ああ 万有のために祈る

私はただ 本仏のお心もちをひきたいから

二

私をどうか みじんにくだいても
みてくれ

この気持にイツワリがあつたら

私の主張にムリがあつたら

私の念うたこと 言うたこと
してきたこと すべて
そこに少しでも ごまかしがあつたら
アイマイがあつたら マチガイがあつたら
誰でもいい つきとめてくれ

よし
そのために 私も手を貸す
私自らを俎上にのせる
私自身の手で生体解剖もある

臓腑の断片もつかみ出そう
今
絶大の光りのもとに照射されている
さあ どうとも拙判してくれ

三

私は誓う

この主張が正しいかぎり

あらゆる脅喝や誘惑は断然
ける

八風に動かぬつもりだ

まして ゴマカシやお追従はマッピラだ
(そんな弟子や信者は私の敵だと思え)

四

ああ この大自然の 聖なる祭壇の上
(北海佐渡の冬 塚原の三昧堂)
私はイケニエとして ささげられてる
私は 血の叫び 永遠の祈りと誓いとを
こめて

この訴状をたてまつる

一切の神々に

三世十方の諸仏の前に

久遠本仏の大御前に！

そしてまたこれを遠く将来の人類に贈る

南無妙法蓮華經

んがえてかんがえて、ぎりぎりのところ、その疑問個条を書きとめてみる。それを他人にではなく、日蓮大聖人様の前に呈して、ぢかにお訓へをいただくことが一番いいであろう。そのための唱導師主さまではないか。事が、人間ばなれのした大きな事だから、宇宙的な動きなのだから、生ま易しい方法や学解でとかくはできっこない日蓮大聖の御手にまかそうと思う。

第五章 結 び

ほんとうに現代こそ恐しい時代、明日はどうなるかわからぬが、そのヘドロ毒液の波のうちにただよひながら之を救うてゆく導いていくのが、日蓮宗だといい乍ら、果して我々お互どうするつもりだらうか。上来仰々しくかかげられた詩句は結局個人的信念の章句である。もとよりその信念からまことのコマが出る、寂光士がかがやき出すのだらう。

とてもとも信じがたいが、そこで大事なことは、自分がすなほによんでみる、考えてみる、またよんでみる、か